

# 息子の涙に

## 誓った優勝

### プレーオフ制し4度目の頂点

1 アンダー、143

荒川 英二（福岡雷山、50歳）



息子の涙が刺激になった。先日、荒川は小6の長男・響輝（ひびき）君のサッカーの応援に駆け付けた。残念ながら、チームは敗れ、響輝君は大粒の涙を流して泣いた。その姿を見た荒川には息子の試合に取り組んだ真剣さが伝わったのだ。「パパも頑張る」。

そして、迎えた今大会。36・36のパープレーで首位に3打差の5位タイで初日を終え、最終日は通算1アンダー143で62歳の榎隆則（大分中央）とのプレーオフに。18番ミドルと17番ミドルの繰り返しで行われたプレーオフは4ホールまでお互いパーで譲らない。5ホール目に荒川がセカンドをピン右60cmにつけてのバーディーで榎を下した。九州ミッドアマは2011年に初優勝して以来、5年ぶり4度目の頂点。まさに「ミスター・ミッドアマ」の面目躍如である。

決着をつけたショットも素晴らしかったが、プレーオフに持ち込んだ最後の2ホールのバーディーは荒川の勝負に対する執念を感じる。榎とは最終日の18ホールも同組。16番を終えた時点で荒川は榎に2打差をつけられていた。並ぶためには残る17、18番での連続バーディーしかなかった。「取るしかない」。17番で6mのスライスライン、18番では4mの下りをねじ込んだ。

「ここ（白杵CC）は縁起のいいコースなんです」と穏やかに笑う。2008年の九州アマでは15位タイに入って初の日本アマに出場し、2019年のインタークラブでは69をマークしてベスグロを獲得。コースに対する相性も味方した。

福岡県筑紫野市生まれで、現在は同県飯塚市在住。25歳でいとこの影響でゴルフを始め、30歳過ぎから競技ゴルフに目覚めた。全国大会の雰囲気は知り尽くしている。「ジャパンは最高が3位なんで、優勝を目指して頑張りましょう」。日本一の道は険しいが、息子の涙がまた後押ししてくれる。



写真は優勝した荒川(左)と2位の榎

## 《プレーオフで敗れた榎》

プレーオフ5ホール目で最初に荒川から第2打を60cmにつけられた榎のセカンドはグリーンオーバーのカラー。狙ったチップインバーディーは惜しくもカップをかすめた。「チャンスをつかみたかったけどね。久しぶりの試合で、いい緊張感もあったし、楽しかった。いいプレーオフだった」と榎はにこやかに試合を振り返った。荒川とは2016年の今大会で最終組から1組前の同じ組で回り、優勝争いを演じながら1打差で敗れて2位タイ。ただ、榎はこの年の日本シニアで優勝を果たしている。「思った以上にやれたし、モチベーションも上がってくる」と今後の競技に意気込みを見せた。



コースからクラブハウスを眺める



217ヤードと距離のある5番ショートホール